

敬虔な信仰の必要

三 枝 樹 正 道

(本校教授)

教育の究極の目的は生命の本質的陶冶である。然し生命そのものゝ本質的陶冶は容易なことではない。従つて從來多くはその屬性を通じて教育が施されてゐたものである。即ち身體及び精神の陶冶を通じて生命の陶冶が行はれてゐたものである。然るに多くはその屬性である身體或は精神に拘泥して本來、生命の一屬性であるべきこれらの精神や身體を而も孤立的個別的なるものとして陶冶するに止り、反つて本質としての生命そのものゝ陶冶が忘却されてゐた傾向がある。茲に教育の停滯があり邪路があるのである。

抑も吾人は自己の生命はこれを體し得るも他人の生命はその真相に於てこれを體驗することは出来ない。然も吾人は他人の生ける相を或は呼吸を通じて或は脈膊を通じてこれを感知することが出来る。人か思考することにより或は推理することによつてその人の人間としての生命相もこれを推知することが出来る。然しかく云ふものの呼吸にしても、脈膊にしても、思考作用にしても推理作用にしても、何れも生命の屬性であつて、本質としての生命があつてこそ始めてその働きがあるので、これらの働きがあるから生命があるのではない。而もこれらの屬性を通じてこそ生命の本質相を知ることが出来るのである。要するに生命は本質であつて呼吸脈膊等の生理作用も知情意等の精神作用も、これらは皆その屬性である。而もこれらの屬性を通じてなければ本質としての生命に直接接觸することは出来ない。茲に於て生命を陶冶せんが爲にその屬性たる身體及び精神の陶冶が行はるゝに至つたのである。然しそれは飽くまでも身體の陶冶のみに終るべきものでなく、精神の陶冶のみに止るものであつてはならない。恰も滋養物を攝取するのは

健康を増進する爲であり、健康の増進は生命をして充分なる活動をなさしめんが爲である。然るに滋養物の攝取に狂奔して遂に榮養障害を起すごとくことがあればそれは主従の轉倒である。又同じく運動にしても、それが眞實生命の活動に貢献してこそ有意義であるが、それが爲に偏側的な發育となり或は短命に終るがごとくことなれば誤謬も亦甚しいと云はねばならぬ。又精神作用にしても知識が發達して犯罪が増加したり、藝術が盛になつて華美な風習が起り等して反つて文化の發展に妨害となり、人類社會の幸福を破壊するが如きことゝなれば、これ生命の活動を阻止するものであつて、教育に於て云ふ眞の意味の精神の陶冶を離るゝこと遠いものである。

さて從來の學校教育を靜かに考察して見るに、總べて物的なる觀察の下に行はれ従つて個別的なる取扱ひに於て、身體精神別々に陶冶された傾きがある。その爲に本來全體的にして區別し難き身體と精神をいかにも別々な或は全く相異なるものゝ如くにさへ考へて時には兩者は相互に相克するかの如くにさへも考へられて來たのである。而してその結果の一つの悪い現れが、學校へ行つてものを覺へさへすればよいと考へられ、或は更に一層悪くなつて學校へさへ長く行けばよいとか、又は學問すれば筋肉的作業はせぬでもよい、とか云ふが如き誤つた考へさへ起つて來たのである。

高等教育を受けたものは身體的には作業をせないもの、身體的作業即ち筋肉的勞働をなすものは高等教育を受けなかつたものと考へらるゝに至つたものである。かくの如く近代の歐洲文明の影響を受けた吾國の教育はかなり曲められて來たものである。文化進みて社會の不安増加し知識の量徒らに多くして人心焦慮する狀態を現はしたものである是れ教育の本筋が要望されて來た理由でもある。

抑も本質を離れて屬性はないものである。然るに兎角此の本質が忘れられて反つて屬性が著しく表面化するのである。こゝに虚禮と虚飾がある。近次殊に遺憾に堪えないのは正月と興亞奉公日の有様である。正月に單に名刺さへ知己の家の名刺函へ投入さへすれが事足りると考へるが故に正月の儀禮が虚禮に終るのである。年の始めに新鮮な氣持になつてまづ神佛を拜し、その美はしきスガスガしい精神を以て衷心から知己と共に新年を壽ぐならば、それこそ、その一年間の生活に對する眞の心固めでもあり、生活の更新でもあつて、これ以上社會教育宗教々育上効果あること

はない。

然るに心なき人々の單なる外形的な考へ方からそれを一概に虚禮として何事も簡單になされるのである。殊に今年の如きは時局柄と云つて門松も紙製の印刷となし、佛様へ供へお鏡餅さへも陶器で飾らうと云ふ話さへあつた。何と云ふ精神を忘れた形式だけに捉はれた誤つた考へ方であらう。神佛を單に偶像視する思想がかゝる誤つた形式を取るに至つたのである。物質の不足の爲に門松も作れないなら立てずにおいてよい。熊々紙で作る必要はない。古い家も新鮮な松の一枝でこそ新年の氣分が出るのである。鏡餅にしても吾人の信仰する神佛ならば眞の困苦欠乏の折ならば靜かに心から謝つて額けば何も供へなくともその方を喜ばれることだらう。形だけお鏡にした陶器などを供へることは神佛を無視した行爲と云はねばならぬ。興亞奉公日にしても一菜の食事戦線の勞苦を共にする意氣込みはよいがいつしか馴れて仕事は休む、郊外へも公然と行ける、反つて娛樂的氣分が横溢して來た觀が無いでもない。それによつて身體の健康になることはよいが、その半面に遊墮の精神が助長されてゐたとすれば誠に寒心に堪えない。勿論全部がさうではないが、かくの如き生活態度が次々と現はれて來るのは眞に人間が陶冶されてゐないからである。切角色々と考案されたよいことも、その豫期の結果が現れずして、曲められた相になるのは全くこの人間の生命の本質的陶冶が無視されてゐるからである。

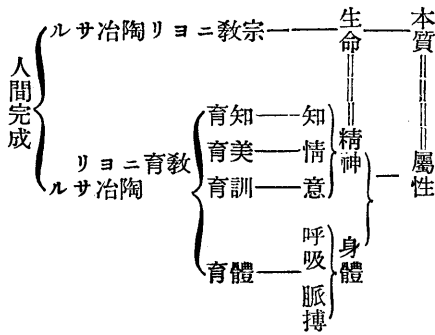
かくの如く通觀して來ると、いかに組織を改めても、又いかに制度を更新しても、又いかに形式を整へてもいかに態裁を飾つても、その中實である本體が即ち人間がそれに對して、否それら屬性よりも一層よく陶冶されてゐなかつたなら、それは眞の更新でもなく進歩でもないことが明瞭になる。私は茲に於て是非とも主張し度く且つ希念して止まないことは眞の人間陶冶眞の宗教々育の實踐である。

制度組織元より大切であり、外形の整備元より結構であるが、これを運用しこれを活用する人間が出來てゐなかつたならば、猿芝居と同様である。寧ろ反つて危険である。恰も茶席で子供がまゝごとをして遊んでゐる様なものである。稀有の名器も有數の名畫も單なる玩具と同様の價值より以上に出でないのである。又身體の强健にしてもそれは何よりも大切であり望ましきことではあるが、その主動的地位にある精神の陶冶が出來てゐなければ、腕白小僧横着

者を出すのみであつて反つて危険である。堂々體軀を裝飾することのみ急であつて何等價值ある仕事が出来なかつたり、或は自己の美貌を化粧することにのみ専心して肝心の自己の子女の教育を忘れるが如きは往々にして見る現實である。實に嘆かはしく感ずる實際である。

更に又研究は深められ知識は進められ學問は發達したとは云へ、それが反社會的に非人間的に用ひられたとすればその害悪は一層甚しいものがある。これは子供に剃刃を弄ばしめるよりも更に危険である。世に智能犯の多いのを見るとかゝる不安を一層痛切に感ずる次第である。

かくて、眞の人間陶冶が行はれず、生命の本質的陶冶が行はれなかつたなら、その他のいかなる事が完備されようともそれは結局無駄に近いことになるのである。而してこの生命の本質的陶冶こそは宗教々育に彼たねばならぬものである。今これらの關係を圖示してみることゝるれば、



即ち必ずしも屬性を通ぜずして人間の直接陶冶を行ふが宗教である。故に宗教には色々の方法があつて一見正反對の如く見ゆる宗派がある。然しそれは要は屬性への執着即ち滯頓を避けしめて常に本質陶冶を念願するが故である。教育は右に述べた種々なる屬性を通じて間接に本質たる生命の陶冶を計ることであるが、その爲に稍々もすると前途の如く屬性である身體、精神等の調別的なる點に執着してその陶冶のみに終つて、反つて具體的全體的なる本質陶冶を忘れることがある。これがトカク學校教育が抽象的になり論則的となる懼れある。宗教を離れた教育の常に陥り易い邪路である。而も宗教は人格の直接々觸による體驗に俟たねばならぬから、茲に一番重要な問題は教育者自身の宗教的體驗である。二つ自己の體驗を通じて、換言すれば信仰による自己の具體的な全體的なる生活を通じて被教育者の接觸して、その人間として全體的直接的接觸の裡に於て教育が施されてこそ眞の教育が完成するものである。若し然らざればそれは單なる知識の授受であり、技能の指示であつて人間の教育ではない。かゝる意味に於て吾人は教育者の宗教的體驗、敬虔なる信仰の特に必要なることを痛感し、一層その方面の努力精進を切望して止まない次第である。